# 「ものだ」のコンテクスト的な機能について

須　田　義　治

**要　約**

この論文では、むすびとして働いている「ものだ」の使用されるコンテクストの諸タイプを記述する。「ものだ」の文の差しだす出来事は、コンテクストにおいて、他の文の差しだす出来事に対するさまざまな関係（コンテクスト的な機能）の中にある。そして、それらは、根拠づけや比較対照など、いくつかのタイプにまとめあげられる。

キーワード：モダリティー　形式名詞　テクスト論

**〈はじめに〉**

形式名詞とも呼ばれる「もの」という名詞は、その語彙的な意味の抽象性のため、文法化し、特別な文法的な意味を表す分析的な形を構成している場合がある。そのようなものの一つとして、「だ」「である」「です」などを伴って、むすびとして、働く場合がある。そのむすびとして働く「ものだ」の表す意味は、基本的に、次の五つに分けられている[1]。

1. 特性：「その時ハッキリと信夫は、人間は必ず死ぬものであるということを納得した。（三浦綾子・塩狩峠）」
2. 理想：「本来アイゼンというものは、自分の靴に合わせて作るものであって、できあがったものを自分の靴に合わせるものではない。アイゼンにかぎらず山道具はすべて、自分本位に作るものだ。（新田次郎・孤高の人）」
3. 回想：「初之輔も、昔、製薬会社の、宣伝部にいたものだ。（林芙美子・めし）」
4. 感慨：「早いものだ。ルリ子が死んで、もう一か月も過ぎてしまった。（三浦綾子・氷点）」
5. 解説：「「昨夜、そこに轢死があったそうですね」と云う。停車場か何かで聞いたものらしい。（夏目漱石・三四郎）」

寺村1984『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』は、「ものだ」を、「のだ」や「わけだ」、さらには、「はずだ」などとともに、説明というカテゴリーにまとめている。どのような構想のもとに、そうしているのか、述べられてはいないが、これらは、いずれも、名詞述語から転化したものである。名詞述語文は、主語となる「～は」の形が、コンテクストにおける既知のものを差しだすという構文論的な構造を、無標のかたちとして持ち、また、主語の指し示すものが、どのようなものであるかということを述語が表すという構文・意味的な構造を持つため、コンテクストの前後の文に差しだされるものについての、何らかの説明として働いている場合が多い。このような名詞述語文の特徴が最も発達し、もっぱら説明そのものを表すような形式に転化したのが、「のだ」なのであろうが、以下に述べるように、むすび化した「ものだ」の場合も、解説という意味以外でも、その文の表す出来事が、やはり、もとの名詞述語文の性格を残していて、他の文の表す出来事に対する何らかの説明として働いているように思われる。ただし、これを説明と呼ぶと、その規定が狭すぎる恐れがあるので、ここでは、より広く、コンテクスト的な機能（コンテクストへの関係づけ）と呼ぶことにする。

しかし、「ものだ」の文も（そして本来の名詞述語文も）、「ものなのだ」と、「のだ」を後接できるように、「ものだ」と「のだ」とは、文の意味的な階層性において、異なるレベルにあるのだろう。コンテクストにおいて説明的な関係を結ぶ明示的な表現手段は、やはり「のだ」であって、「のだ」がつかない場合は、無標の形式として、そうした関係について、あるともないとも語っていないのかもしれない。[2)]

また、「のだ」は、説明という機能が、その意味にまでなっている形と言えるが、「ものだ」の場合は、やはり、上にあげたいくつかの意味を限定的に表すことが、その一次的な使命であって、コンテクスト的な機能は、あるとしても、二次的なものにすぎないであろう。しかし、「ものだ」がつく文とつかない文とが、意味的にあまり変わらないように思えるものでは、その違いを、このコンテクスト的な機能に求めてみたくもなる。だが、やはり、「ものだ」がつく文とつかない文との意味的な違いについては、さらにくわしく検討してみなければならないし、「ものだ」がつく文のコンテクスト的な機能を考えるとしたら、当然、「ものだ」のつかない文の調査も同時に行い、その二つを比べてみなければならないはずである。けれども、いまの段階において、「ものだ」のつかない文の調査は、その複雑さのため、あとまわしにせざるを得なかった。その意味において、以下の記述も、必然的に不十分なものなのであるが、記述的な調査の出発点として、まずは、「ものだ」のついた有標の文のコンテクスト的な機能を記述しておくことも、まったく意味のないことではないだろう。少なくとも、それによって、「ものだ」の文が、どのようなコンテクスト（非言語的なコンテクストも含めて）において使用されるかということだけは、明らかにできるはずである。

以下、上にあげた「ものだ」のそれぞれの意味ごとに検討していくが、解説を表す「ものだ」は、説明的に働いていることが明らかなので、省略する。

## 1. 特性（本性、本質）

### (1) 個別からの一般の引きだし [3)]

先行する文に個別的な出来事が差しだされ、後続する「ものだ」の文に、それに対する一般的な出来事が差しだされている場合がある。話し手は、自らがとらえた個別的なものの現象から、自分の経験や知識の蓄積をもとにして、その個別的なものの現象にひそみ、それを規定している、ものの一般的な特性を取りだす。話し手は予測しがたい個別的な出来事の実現の当然さを、ものの一般的な本質によって確認し、納得し、受けいれるのだろう。このとき、個別は一般的な特性を取りだす一つの根拠となる。

この、「ものだ」の文を含むコンテクストは、主体の論理的な操作の手順をうつしだしている。この論理的な操作の手順は、基本的に、個別から一般を引きだしていると言えるが、その引きだされた一般を、また個別に引きあてて、確認しているという側面もある。そして、そのどちらとも解釈しかねる例も少なくない。しかし、基本的に個別的な現象から一般的な特性を引きだしてくるのであれば、この「ものだ」の文の場合、個別と一般とは一致の関係にある。

話し手によって確認された、あるいは、再確認された一般的な特性であれば、そこに、話し手の、ある種の感情的なニュアンスがつきまとう。話し手による納得という、出来事の主観的なとらえ方である点において、「ものだ」のつかない文とは異なっているのだろう。その話し手性が、「ものだ」がモダリティーの一つの表現手段であることを示しているように思われる。

1) 改まった黒い着物でも抑えかねる全身の上品な色気で、誰にもたちまさったあでやかさである。見ていると、衣装は人を美しくするものではないが、人は衣装を美しく見せるものだと思わせられる。妓とはこうしたものなのかと梨花はまじまじと見る。（幸田文・流れる）
2) 階下で、大きな声で、てる子が嘘っぱちな発音で、ケンタッキホームを英語で歌っていた。若いものは何にでもすぐ酔っぱらってゆける情熱があるものだと、志村は、ふっと、柏原の百姓家で見た這いつくばった松葉牡丹の野性的な花を思い浮べていた。（林芙美子・松葉牡丹）

「ものだ」の表す特性が、個別的な出来事から、話し手の経験や知識にもとづいて、引きだされてくる話し手の判断であれば、その一般性は低いこともある。こうした、話し手が個別から一般を引きだす「ものだ」の主観的な性格は、次の例のような、話し手の持つわずかな経験をもとにした一般化に、よく現れている。しかし、話し手は、この一般性の低い出来事を確信しているのであって、決して、話し手の、それに対する確信度が弱いというわけではない。

3) 落した原稿って出てこないものだね。僕は自分の原稿を二度なくしたことがあるけれども、どうしても出てこなかった。（井伏鱒二対談集）

(2) 個別への一般の引きあて

次の例では、「ものだ」の文に差しだされる一般的な出来事が、それに先行する文に差しだされた、なぜそれが実現するのかと疑問を持たれている個別的な出来事の実現の当然さを、一般性から解きあかし、説明している。つまり、一般的にこうだから、この個別的な場合は当然こうなると説明するのである。したがって、これは、個別から一般を引きだしているのではなく、個別に、一般を引きあてていると言える。「ものだ」の文に差しだされる一般的な出来事は、話し手がすでに持っていたものであり、話し合いのテクストであれば、それを話し相手に教えるというニュアンスを持つ。

4) 「陽子のおかあさんは、好きだよ。でも、きらいなところも少しはあるね」
「ぜんぶ好きじゃないの？」
「だれでも、人間というものは、好きなところや、きらいなところがあるもんだからね」
（三浦綾子・氷点）
5) おばさんはどんな話をしてくれたか覚えていないが、おばさんの顔は大きく、いくらか四角な感じで目は細く、もののいい方がのんびりしていて、せかせかしていない、リョウヘイの顔を見るだけで、ほかのものを見ないで話をするのである。これはおばさんだけにかぎられたことではなく、おとなというものは子どもと話をするときには、なぜかじっと子どもの顔ばかり見つめるものである。（室生犀星・ふたりのおばさん）

(3) 根拠づけ（潜在的な個別）

a) 判断の根拠
以上のような、コンテクストに顕在化した個別と一般との直接的な結びつきと異なり、個別

が潜在化していて、コンテクストとの関係がより間接的なものがある。たとえば、次の例は、「ものだ」の文が、推論を行うための根拠となる一般的な法則を差しだしている。その一般的な法則を現実につきあわせて、その一般に対応する個別が現実の個別と一致しているか矛盾しているかによって、未確認の事実についての判断を導いているのである。例えば、最初の例で言えば、／本当に愛している男は女を独占するものだ／という、話し手の信じる一般的な法則の中の／男は女を独占する／という部分が、／あなた（男）は、わたし（女）を独占しない／という個別的な事実と照らしあわされ、それと矛盾することから、一般的な法則の中の／本当に愛している男／という部分が否定され、／あなたは私を愛していない／という判断が導かれている。

また、ある個別的な出来事に関して、話し手が、自分の判断の根拠となる「ものだ」の文を発話することによって、話し相手の持つ異なる判断に対して反論している場合もある（例7）。

6)「あなたって、本当は私を愛していないのかも知れないわね。本当に愛している男は女を独占するものよ」（石川達三・洒落た関係）

7) おばあさんは目を丸くして、
「千代紙なら、うちの子はたくさんもっていますよ。そんなものはいりません」といって断りました。けれどおじいさんは、無理に千代紙をおばあさんに手渡しました。
「そういうものではありません。またちがった色の千代紙をもらうと、子供というものは、喜ぶものですよ」と、おじいさんはいいました。（小川未明童話集）

b) 命令・意向の根拠

次の例は、「ものだ」の文が、個別と一般との関係を越えて、他の文の差しだす動作の命令や意向に対する理由づけや根拠づけとして働いている。例えば、最初の例で言えば、「女ひとりの行動はあんがいわかるものですよ。」という「ものだ」の文の差しだす一般的な出来事から引きだされる個別的な出来事を根拠として、「とにかく、いちおう、熱海と静岡の駅や宿を調査してみます。」という意向が導かれる。この「ものだ」の文の差しだす一般的な出来事に対する個別的な出来事は、命令や意向の文の差しだす出来事が引き起こす結果である（あるいは、それをしなかった場合に起こる結果である）。つまり、どのような結果になるかを予想しながら、それに動機づけられて、話し手は、動作を命令したり志向したりしているのである。このように、命令や意向の文の差しだす出来事と、「ものだ」の文の差しだす一般的な出来事との関係は、一つの出来事における個別と一般との関係ではなく、別の出来事の間の関係であって、間接的である。

8)「よろしい。今からでは、時日が相当たっているから、はたして効果があるかどうかわかりませんが、とにかく、いちおう、熱海と静岡の駅や宿を調査してみます。女ひとりの行動はあんがいわかるものですよ」（松本清張・点と線）

9)「奥さんお大事にね」と言った。「……中年になってから独りになると、辛いもんだって言うわ。でも癌ではどう仕様もないわね。あなたもお気の毒……」（石川達三・洒落た関係）

c) 過去の動作・状態の根拠

次の例では、命令や意向などのように、まだ実現していない動作ではなく、話し手や登場人物の、すでに実現している動作や状態について、なぜそれを行ったか、あるいは、なぜそれが

起こったかという理由や原因を、「ものだ」の文の差しだす一般的な出来事が、解きあかしている。意志的な動作であれば、動作の仕手は、「ものだ」の文に差しだされる一般的な出来事を認識して、それにもとづき、自らの個別的な動作を決めているし（例10）、無意志的な心理的な状態などであれば、一般的な出来事を認識することによって、その心理的な状態が引きおこされる（例11）。つまり、これらは、主体の認識を媒介として起こってくる動作や状態である。

10) それからホテルの中の売店で万年筆を一本買った。これも龍一への土産である。子供は万年筆というものに一種特別なあこがれを持っているものだ。影山は多分これから先、（僕に万年筆をくれた小父さん）……として、永く少年の記憶に残ることになるだろう。（石川達三・洒落た関係）
11) 私は水を差すわけじゃないけど、どうも感心しない気がするンだ。——本当に、女ってものは、そうした一寸した事からぐれ出すものだからね。（林芙美子・白鷺）

(4) 比較対照

個別的な人や物の、個別的な出来事が、一般的な人や物の特性と矛盾することを示すことによって、その個別的な人や物の特殊性や例外性を際だたせ、特徴づける場合がある。これは、一般的な人や物の特性が、「（ふつう、たいがい）～ものだが」の形で提示されることが多い。また、一般的な特性を表す「ものだ」の文のあとに、それと類似した例を続ける場合もある（例13）。

12) 庭ずきの茶人はふつう常緑樹をよろこぶものだが、道三が設計したこの庭には、桜樹が圧倒的に多い。（司馬遼太郎・国盗り物語）
13) 一体、年をとると、三百六十五日の早さに驚かされるものだが、殊に戦後の十五年は、夢のとりとめなさで過ぎて行った、と思う者もすくなくあるまい。（里見惇・極楽とんぼ）

## 2. 理想（当為、当然）

理想を表す「ものだ」の文は、話し合いのテクストにおいて、命令的に機能していると言われる。そうであれば、関係づけの対象は、話し相手の動作や態度であるということになるだろう。そのため、これは、言語的なコンテクストに対する関係づけではなくなっているとも言える。例えば、次にあげる例では、話し手の目の前に現れている、話し相手の個別的な動作や態度と矛盾するような一般的な出来事を差しだす「ものだ」の文を発話することによって、話し手は、話し相手の、その動作や態度を批判したり非難したりしている。つまり、「ものだ」の文が表す一般的な出来事に対応する個別的な出来事が、目の前の現実の個別的な出来事と矛盾しているのである。理想を表す「ものだ」は、常に、現実の否定として働いている。

14)「君が、あんまり余計な話ばかりしているものだから、時間が掛って仕方がない。好加減にして出て来るものだ」（夏目漱石・三四郎）
15)「いいえ、私は沢山です」と省吾は幾度か辞退した。「そんな、君のような——」と丑松

は省吾の顔を眺めて、「人が呈げるッて言うものは、貰うもんですよ」（島崎藤村・破戒）

話し合いにおいて、話し手の発話の中に、命令文などが「ものだ」の文の前に差しだされていることも多い。この場合は、「ものだ」の文が、その命令文などが表す話し手のムード的な態度に対する根拠づけとして働いているようでもある。命令文などには、「ものだ」の文の差しだす一般的な出来事に対応する個別的な出来事そのままではないが、それに近い内容が差しだされている。

16)「どんな男か、あのホームまで行って窓からのぞいてやるわ」
　八重子がはずんだ声で言った。
「よせ、よせ。ひとのことはほっとくものだ」（松本清張・点と線）

17)「どうしたンだい。尋ね人、かけとけよ」
「私、きらいなの。こんなの、大きらいだわ……」
「そうかねえ、この戦争で、肉親知己、それぞれ、離散して、尋ね求めているンだぜ。少しは、そンな、淋しい人間のいる事も、耳にいれるもンだ」（林芙美子・めし）

理想を表す「ものだ」の文は、また、次の例のように、話し手の判断の根拠となっている場合もある。この場合、「ものだ」の文に差しだされる一般的な出来事が、話し相手の動作や態度に向けられていないこともある。しかし、ここにも現実の個別との矛盾はやはり存在する。

18)「でも、ケーブルができたから、だれでも六甲山へ登れるようになったのじゃなくて」「無いほうがいいな、山は足で登るものだ」（新田次郎・孤高の人）

19) 第一あの坊主が狡いじゃないか。妾の方の子供はさんざん可愛がっているくせに、正妻の子供を処分しようなんて、人を喰った話だ。坊主も人間だから、浮気をするなとは言わないが、妾に子供を産ませたら、もうそれは浮気ではないよ。浮気というものはもっと軽くやるもんだよ」（石川達三・酒落た関係）

## 3. 回想

### (1) 現在の出来事への、過去の出来事の引きあて

次の例では、現在の、話し手のとらえた出来事によって、同じ主体の、同じタイプの出来事で、過去に何度も繰りかえされたものが、話し手の記憶から引きだされている。このように、過去の出来事を記憶の中から引きだしてくる一つの理由は、現在の出来事を一般化してとらえるために、あるいは、それに対する評価を下すために、その類例を集めているということである。例えば、最初の例では、「手は針を動かしながら、頭の中では三時間ちかくも息子の帰りを待っていた。」という個別的な出来事をきっかけとして、話し手は、「かつてはこのようにして良人の帰りを待ち続けたものだった。」という過去の出来事を記憶から引きだし、それらを材料として、「男というものは良人であろうと息子であろうと、生涯女を待たせておいて、どこかをうろつき廻るものであるらしかった。」という判断を導いている。判断を導いていることが明確であれば、これも根拠づけとして働いていると言えるだろう。

20) 手は針を動かしながら、頭の中では三時間ちかくも息子の帰りを待っていた。かつてはこのようにして良人の帰りを待ち続けたものだった。男というものは良人であろうと息子であろうと、生涯女を待たせておいて、どこかをうろつき廻るものであるらしかった。（石川達三・青春の蹉跌）

21)「菊人形は可いよ」と今度は広田先生が云い出した。「あれ程に人工的なものは恐らく外国にもないだろう。人工的によくこんなものを拵えたという所を見て置く必要がある。あれが普通の人間に出来ていたら、恐らく団子坂へ行くものは一人もあるまい。普通の人間なら、どこの家でも四五人は必ずいる。団子坂へ出掛けるには当らない」
「先生一流の論理だ」と与次郎が評した。
「昔教場で教わる時にも、よく、あれで遣られたものだ」と野々宮が云った。（夏目漱石・三四郎）

話し手の目の前に現在ある物をきっかけとして、それに関わる、過去の反復的な出来事が引きだされてくる場合がある。これは、類例を利用して目の前の個別的な物に対する特徴づけをしているとも考えられるが、単に昔のことを思いだしているというものも多い。

22) 肩へ手をかけて抱き寄せてやると、娘はあどけなく唇を開けて、下から富岡を覗き込んだ。じいっと見ていると南方系の顔であった。仏印へ行くと、こんな顔が沢山あったものだがと、娘のあさぐろい顔を富岡はしみじみと眺めた。（林芙美子・浮雲）

(2) 根拠づけ

次の例では、「ものだ」の文の差しだす、話し手の記憶から引きだされた過去の反復的な出来事が、話し手が行っている現在の動作や判断に対する根拠づけとして働いている。過去において繰り返されていたから、現在においても、それが起こりうるというわけである。

23) あんまり泣きやまない次郎の気持をそらすつもりでもあったろう。
「第三のコース、桂次郎君。あ、飛び込みました、飛び込みました」
私は大声をはりあげて、どなってみた。その昔、次郎はテレビの競泳に感激して、蒲団から畳の上にさかんなダイビングをやらかしていたものである。その記憶がかすかにでも残っているかどうか。
が、看よ。この時、次郎の表情の中に湧き出した拮勁とでも呼んでみたい素早い反応のたしかさ。とうとうその事を思い出したと云うような鋭い歓喜。泣いている目を大きくみはって、泣き声をピタリとやめ、かなわぬ四肢を交互にピクピクと波打たせる。（壇一雄・火宅の人）

(3) 比較対照

次の例は、話し手がとらえた現在の出来事（基本的に反復的な出来事か長期的な出来事）から、「ものだ」の文の差しだす、それと同じ主体による過去の反復的な出来事が引きだされているのだが、それらは、一致しておらず、矛盾の関係にある。この場合、多くは、過去の出来事にいい評価が与えられていて、それとの対比において、現在の出来事が悪い評価を受けとって

いる。「ものだ」の文が、現在の出来事に対する話し手の感情・評価的な態度をほのめかしていると言えるだろう。この「ものだ」の文は、「ものだが」の形で、あわせ文の中の、先行する文に差しだされていることが多い。

また、回想を表す「ものだ」も、一回的な出来事を差しだしていることがあるが、この場合は、普通、反復的な出来事を差しだしていて、一回的な出来事は少ないようである。

24) その昔、私は鯉のぼりをあげるのが殊のほかに好きで、一郎次郎弥太の幟まで染め抜かせ、赤黒さまざまの鯉のぼりをあげては、莫迦々々しく騒いだものだが、次郎が発病以来、とんと鯉のぼりなどあげてみる気がなくなった。（壇一雄・火宅の人）

25) 若いときには、釣りをしていると、こうしてはいられないと思ったものですが、釣りの味を覚えると、もう仕事のことも忘れちゃって。（井伏鱒二対談集）

## 4. 感慨

### (1) 評価と、その対象との関係

次の例では、出来事が、とりたての形をとった主語や題目語として差しだされ、それに対する評価を、「ものだ」の述語が表している。これは、主語や題目語のさしだす出来事に対して、述語の差しだす評価が説明として働いているとも言えるが、一つの文の成分の間の関係なので、これまであげてきたコンテクスト的な関係づけとは異なっている。

感慨を表す「ものだ」は、そのムード的な意味のため、説明という規定から最も遠ざかっているように思われるが、それでも、コンテクスト的な関係づけは持っているとすれば、やはり、そこに、「ものだ」の文の使われる理由を認めることができるかもしれない。

26) いまごろ、遊覧バスは、どの辺を走っているのかしら……。三時間半も乗って、二百円は、一寸安いものだわと思いながら、いつも、貧乏くじをひいては、こじれて、何処へも行きそびれてしまう、自分の、このごろの気持ちが、三千代は、自分でも、厭になっていた。（林芙美子・めし）

次の例は、話し手の発話の中にある、別の文の差しだす出来事に対する評価を、「ものだ」の文が表している。いくつかの文の連なりが、評価の対象を差しだしていれば、評価を差しだす文は、そのあとに位置して、全体をまとめあげていると言える。この場合、「ものだ」の文は、まとめあげという、コンテクストに対する関係づけを表すと言えるだろうか。

27) 英国を見給え。この両主義が昔からうまく平衡が取れている。だから動かない。だから進歩しない。イプセンも出なければニイチェも出ない。気の毒なものだ。（夏目漱石・三四郎）

28) おとうさん、わたしも子どものじぶん、庄おじさんの手つだいをして、カスミあみにひっかかった小鳥たちのくびの骨をおるのをやらされましたが、じつにいやな気のするもんですねえ。」パパが、思いだしたようにいった。（いぬいとみこ・ツグミ）

次の例は、話し合いのテクストであり、「ものだ」の文が、話し相手の発話や話し合い全体に

差しだされている出来事に対する評価を表している。これは、コンテクストに対する関係づけとは言えないようなものになりつつある。

29)「今日はお休みどころじゃないわよ。一週間ぐらい休むらしいのよ」
　八重子が眉を上げて告げた。
「ほう。じゃ、あの男と新婚旅行か？」
　安田は杯を口からはなしながら言った。
「そうなのよ。あきれたもんね」（松本清張・点と線）

30)「病院には、もう出てるんだって？」
高木は、次子の持ってきたチーズを三片ほど、いっぺんにほおばった。
「病院に出てる方がラクだよ」
「ぜいたくなもんだな。シェーンな奥方の顔でもながめていたらよさそうなもんだ」（三浦綾子・氷点）

次の例の「ものだ」の文は、話し手の確認した現実に対する評価を差しだしている。ここでは、完全に言語的なコンテクストに対する関係づけではなくなっている。

31) 初之輔は、門前の生垣に、白い虫のついているのを、指で弾きながら、
「おい、これ、箒で、はらっとくといいね」
　と、云った。
「随分、虫がついたもンだなア」
「ヒバの垣根ですか？」（林芙美子・めし）

(2)　比較対照

ある対象に対する話し手の評価を、同種のものに対する評価との比較対照において差しだす場合がある。これは、話し相手の持つ評価を否定していることが多い。また、この場合、主語がとりたての形を取って、「～など（なんか）…ものだ」という形になる。

32)「そうですか、寮母さんもたいへんですわね。うちのも、わがままものですから、おせわをかけているだろうと、いつも話しているんですよ。」
「いいえ、おたくのおぼっちゃんなど、おとなしいものですよ。」（長崎源之助・彦次）

33)「無かったら今夜一晩ぐらい、わたしのとこへお泊んなさい。」
「いいのか、大丈夫か。」
「何がさ。」
「いつか新聞に出ていたじゃないか。アパートでつかまった話が……。」
「場所によるんだわ。きっと。わたしの処なんか自由なもんよ。お隣も向側もみんな女給さんかお妾さんよ。お隣なんか、いろいろな人が来るらしいわ。」（永井荷風・墨東綺譚）

**〈おわりに〉**

以上に検討した、「ものだ」の表すコンテクスト的な機能は、最も一般的に言えば、「ものだ」

の文の差しだす潜在的な出来事を、別の文の差しだす顕在的な個別的な出来事に関係づけるという形でのコンテクスト的な関係づけである。そして、この潜在と顕在というカテゴリーは、個々の個別的な意味において、次のような、変種として実現する。それぞれ、さきにあげてあるものが潜在的なものであり、あとにあげてあるものが顕在的なものである。

「ものだ」
特性：一般的な特性⇨個別的な出来事
理想：話し手の一般的な理想⇨話し手以外に関わる個別的な出来事
回想：話し手の過去の記憶にある出来事⇨現在の個別的な出来事
感慨：話し手の主観的な評価⇨客観的な個別的な事態
解説：未確認の個別的な出来事（話し手により推量された出来事）
⇨確認された個別的な出来事

この一般的な関係が、個々のコンテクストにおいて、さまざまなバリエーションに派生しているのである。この、「ものだ」のコンテクスト的な機能を説明と呼んでいいのか、問題のあるところだが、コンテクストに対する何らかの関係づけを「ものだ」の文が持っていることは確かであろう。今後は、「ものだ」のつかない文を調べあげ、それとの比較対照において「ものだ」の文の本質を明らかにしていきたいと思う。

## 注

1　それぞれの意味の説明については、寺村秀夫1984『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』pp297-305参照。ただし、理想を表す「ものだ」を筆者は次のように特徴づける。理想を表す「ものだ」の文の構文論的な特徴は、述語が意志動詞であること（特性を表す「ものだ」は述語が無意志動詞や形容詞である）と、典型的には、動詞の指ししめす動作の対象を差しだす名詞が、「～は」などのとりたての形をとっていることである。したがって、後者の点において、理想は表す「ものだ」は、本来の名詞述語文に近くなるのである。
2　ただし、「ものだ」の場合、「のだ」を伴うことができるのは、主に、特性を表す「ものだ」である。それは文の意味的なタイプによると思われる。
3　奥田1990, 1992は、「のだ」や「わけだ」の表す説明を、つけたし的な説明とひきだし的な説明とに分けている。それらは、本稿における分類と部分的に重なるが、完全に同じではない。

## 参考文献

揚妻祐樹　1990「形式的用法の「もの」の構文と意味―〈解説〉の「ものだ」の場合―」『国語学研究』30, 東北大学
奥田靖雄　1990「説明（その1)」『ことばの科学』4, むぎ書房
1992「説明（その2)」『ことばの科学』5, むぎ書房
佐藤里美　1997「名詞述語文の意味的なタイプ」『ことばの科学』8, むぎ書房
2000「「ものだ」の機能」『琉球大学法文学部紀要』6, 琉球大学

2001「テクストにおける名詞述語文の機能―小説の地の文における質・特性表現と《説明》―」『ことばの科学』10, むぎ書房
坪根由香里　1994「「ものだ」についての一考察」『日本語教育 84』
寺村秀夫　1978「連体修飾のシンタクスと意味―その４―」『日本語・日本文化』7, 大阪外国語大学留学生別科、のちに寺村秀夫 1992『寺村秀夫論文集Ⅰ』くろしお出版に所収
1984『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
野田春美　1995「モノダとコトダとノダ」『日本語類義表現の文法（上)』くろしお出版
1997『「の（だ)」の機能』くろしお出版
籾山洋介　1992「文末の「モノダ」の多義構造」『言語文化論集』名古屋大学

# On the contextual function of " mono-da "

Yoshiharu　SUDA

**Abstract**

"Mono　(formal noun) " with "da (copula) " functions as a kind of analytical copula in the predicate. In this paper I describe the contextual function of "mono-da", in other words, the types of relation to the other sentences in the context. Generally, the latent (potential, implicit) situation expressed by "mono-da" is related to the actual (explicit) situation.

Key words: modality　formal noun　textlinguistics